

平成 2 7 年 度 実 践 報 告 集

時 計 台

全校研究テーマ

児童生徒の特性とニーズに応じた教育

<小学部研究部会>

基礎的な身体の動きを育てる「朝の運動」

<中学部研究部会>

「作業学習から探る、生徒に分かりやすい授業」

～多様化する生徒の課題に応えるために～

<高等部研究部会>

「生徒が主体的に取り組むことのできる作業学習を目指した授業」

を考える

<重複学級・訪問学級研究部会>

児童生徒一人一人のコミュニケーション能力を生かすための授業

平成 2 8 年 3 月

千葉県立富里特別支援学校

すべては授業の充実のために

校長 佐々木 亮夫

本校は昭和63年4月1日に県立印旛養護学校から分離し、開校しました。今年度で28年となります。開校当初から研究紀要を編纂していましたが、「時計台」という名称になったのは、平成8年度からのようです。したがって今年度でちょうど20年目の時計台の発刊となるわけです。

市道側から本校に入ってくると、校舎の一番高い部分に時計があるのが良く見えます。本当に時計台という表現がぴったりであると感じます。

本校の校歌の2番にも時計台が使われています。

この20年間に学校周辺の様子もだいぶ変わってきました。制度が変わり、養護学校から特別支援学校に校名も変わりました。もちろん児童生徒も教職員も変わりました。

時計台はその間の変遷をずっと見続けていたわけです。

平成29年度からは、(仮称)栄特別支援学校が開校し、本校の児童生徒の一部も、転学する予定です。

あらためて、月日の流れを感じる中でも、学校として一番大事なことは「授業の充実」であります。これは普遍的な学校に課せられた使命であると言えます。

本年度も研究テーマに「児童生徒の特性とニーズに応じた教育」を掲げ、小学部、中学部、高等部、AC学級(重複、訪問学級)毎に研究を進めてきました。

小学部では「基礎的な身体の動きを育てる朝の運動」

中学部では「作業学習から探る生徒に分かりやすい授業」

高等部では「生徒が主体的に取り組むことのできる作業学習を目指した授業」

AC学級では「児童生徒一人一人のコミュニケーション能力を生かすための授業」とサブテーマに授業という文言を加え、より授業の充実を意識して取り組んだ結果が、今回発刊したこの「時計台」であります。

ぜひご忌憚のない御意見、御助言をいただければ幸いです。

本校を見下ろしている時計台は今日も時を刻んでいます。この研究紀要の発刊は次の研究の始まりでもあります。

児童生徒の健やかな成長、自立に向けて、日々の授業の充実が何より重要であり、今後も続けていかなければなりません。

最後に本校の研究を支えてくださった筑波大学体育系准教授 澤江幸則先生、県立八千代特別支援学校教頭 荻野政仁先生、県立市川特別支援学校教頭 牧野英司先生、教育庁教育振興部特別支援教育課指導主事 保科靖宏先生に厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

目 次

はじめに

平成27年度の研究について

- 1 研究テーマ
- 2 研究の目的
- 3 研究の進め方
- 4 研究を進める組織
- 5 授業研究会講師
- 6 年間計画
- 7 本年度のまとめ

小学部研究部会

- | | | |
|------------------------------|-------|-----|
| 1 小学部の研究について | ----- | 小 1 |
| 2 年間計画 | ----- | 小 1 |
| 3 日課表 | ----- | 小 2 |
| 4 「朝の運動」について | ----- | 小 3 |
| 5 まとめと今後の課題 | ----- | 小 3 |
| 資料1 小学部で取り組みたい運動一覧 | ----- | 小 6 |
| 小学部重複4・5組「からだづくり」で取り組みたい動き一覧 | | |
| 資料2 平成28年度年間指導計画 | ----- | 小10 |
| 資料3 チェックリスト | ----- | 小14 |

中学部研究部会

- | | | |
|----------------|-------|-----|
| 1 中学部の研究について | ----- | 中 1 |
| 2 年間計画 | ----- | 中 1 |
| 3 普通学級の日課表 | ----- | 中 2 |
| 4 中学部の作業学習について | ----- | 中 3 |
| 5 作業学習学習指導案 | ----- | 中 4 |
| 6 まとめと今後の課題 | ----- | 中12 |

高等部研究部会

- | | | |
|---------------|-------|-----|
| 1 高等部の研究について | ----- | 高 1 |
| 2 普通学級の日課表 | ----- | 高 2 |
| 3 本校の作業学習について | ----- | 高 2 |
| 4 作業学習学習指導案 | ----- | 高 3 |
| 5 まとめと今後の課題 | ----- | 高13 |

重複学級・訪問学級(AC学級)研究部会

- | | | |
|-----------------|-------|------|
| 1 AC学級の研究について | ----- | AC 1 |
| 2 年間計画 | ----- | AC 1 |
| 3 AC学級の日課表 | ----- | AC 2 |
| 4 AC学級の自立活動について | ----- | AC 3 |
| 5 自立活動学習指導案 | ----- | AC 4 |
| 6 自立活動題材例 | ----- | AC12 |
| 7 全体研究会について | ----- | AC16 |
| 8 まとめと今後の課題 | ----- | AC18 |

資 料

- | | | |
|----------|-------|--------|
| 本校の指導内容表 | ----- | 資料1～12 |
|----------|-------|--------|

あとがき

研究同人

平成27年度の研究について

本校では「児童生徒の特性とニーズに応じた教育」を全校テーマとし、各研究部会で対象となる授業を取り上げ、サブテーマを設定して研究活動に取り組んだ。

1 研究テーマ

「児童生徒の特性とニーズに応じた教育」

各研究部会サブテーマ

- | | |
|-----------|---|
| ○小学部研究部会 | —基礎的な身体の動きを育てる「朝の運動」— |
| ○中学部研究部会 | —「作業学習から探る、生徒に分かりやすい授業」
～多様化する生徒の課題に応えるために～— |
| ○高等部研究部会 | —「生徒が主体的に取り組むことのできる作業学習を目指した授業」を考える— |
| ○AC学級研究部会 | —「児童生徒一人一人のコミュニケーション能力を生かすための授業」— |

2 研究の目的

(1) 多様なニーズに応じた指導の充実

現在、特別支援教育においては、児童生徒の障害の多様化等により教育的ニーズが多様化し、一人一人の特性やニーズに応じた指導・支援が一層求められている。研究活動を通して私たち教師が、児童生徒の特性やニーズに基づいた個別の指導計画等の教育計画を立案し、実践できる力をつけていくことを目的とする。

(2) 授業実践を通じた授業力の向上

研究活動を通して、より良い授業の在り方を研修し、指導の充実や授業力の向上を図っていくことを目的とする。また、研究活動で実践してきたことにより出てきた課題を改善して維持したり、引き継いだりできるようにしていく。

3 研究の進め方

(1) 小学部研究部会においては、系統立てた指導・支援内容を作成する。

小学部研究部会では、2年計画で体育(朝の運動)について取り上げ、今年度は授業実践と並行して本校の小学部段階で経験したい動きの指導・支援内容を作成する。次年度にその指導・支援内容での授業研究会を行う。具体的な方法は、小学部研究会で検討し実施する。

(2) 中学部・高等部・AC学級研究部会においては、授業研究を行う。

中学部・高等部研究部会では作業学習、AC学級研究部会では自立活動(集団学習)についての授業研究を行う。具体的な授業研究の方法は各研究部会ごとに検討し実施する。授業研究会のうち1回を全校研究会とし、他の研究部会の研究内容について知り、研究を深める機会とする。

(3) 1年間の研究内容について実践報告集にまとめる。

1年間の取り組みをテーマに沿って整理してまとめ、実践報告集に掲載する。研究部会ごとに指導案や支援の内容表、「授業内容・題材例」など、内容を工夫し、今後の指導の参考となるようなものとする。

4 研究を進める組織

- | | |
|-----------|---|
| 〈研究推進委員会〉 | 校長、教頭、事務長、主幹教諭(教務主任)、副教務、部主事、研究主任、研究副主任 |
| 〈研究係会〉 | 各研究部会の研究係 |
| 〈研究部会〉 | 小学部研究部会、中学部研究部会、高等部研究部会、AC学級研究部会 |

5 授業研究会講師

- ・小学部研究部会講師 澤江幸則先生(筑波大学体育系准教授)
- ・中学部研究部会講師 荻野政仁先生(千葉県立八千代特別支援学校教頭)
- ・高等部研究部会講師 牧野英司先生(千葉県立市川特別支援学校教頭)
- ・AC学級研究部会講師 保科靖宏先生(千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課指導主事)

6 年間計画

研究推進委員会、全校研究会

日 程	内 容	講 師
5月 7日(木)	研究推進委員会 本年度の研究について	
5月27日(水)	全校研究会① 本年度の研究について	
7月27日(月)	部内研究会(小学部)	澤江幸則先生
9月 9日(水)	全校授業研究会(AC学級)	保科靖宏先生
10月30日(金)	全校授業研究会(中学部)	荻野政仁先生
11月 4日(水)	全校授業研究会(高等部)	牧野英司先生
2月26日(金)	研究推進委員会 本年度のまとめと次年度の研究について	
3月 2日(水)	全校研究会② 本年度のまとめと次年度の研究について	

7 本年度のまとめ

本校の研究は、全校研究テーマのもと各研究部会でサブテーマを設定して取り組む方法をとって5年目になる。各研究部会で全校研究テーマの追究に適している授業を研究対象にし、教師がより意欲的に研究活動に取り組むことができるよう、各研究部会で研究の方法を工夫して取り組んできた。また、全校授業研究会での協議を縦割りでのグループ協議の方法を採ることで、多方面からの意見を引き出すことができた。これまでの研究を通して得た考え方や指導の手立てを様々な授業に広げていくことができれば、より充実した指導が継続して行われるようになると思う。

今年度は、新しい研究テーマを設けて研究を行った部会もあれば、昨年まで取り組んできたテーマを引き継ぎつつ新たな視点を加えて研究を行った部会もある。今年度の研究成果と課題については、各研究部会の報告を参照していただきたい。

来年度は、今年度の研究を継承し、授業実践を通して今年度あげられた課題について各研究部会で研究を深めていく。また、取り組んでいるテーマはそれぞれであるが、小学部から高等部までの児童生徒が同じ学校で生活をしているので、より小中高のつながりを意識して授業実践に取り組めるようにしていきたい。今後も児童生徒一人一人のニーズに合わせた指導をさらに積み重ね、授業の充実と児童生徒が豊かに生きることにつながる研究を続けたいと考える。

資 料

- ・本校の指導内容表

指導内容表

児童生徒の目標設定と、自閉症の特性に応じた支援のために

千葉県立富里特別支援学校

トップページ

個別の指導計画の項目	指導内容の項目			
1. 基本的生活習慣	食事	排泄	靴、衣服の着脱 身だしなみ	整理整頓 物の管理 衛生 掃除・洗濯
2. 健康・運動	睡眠 生活のリズム 服薬 発作 健康の維持	手、指の動き 全身の動き 歩く 走る 跳ぶ	体操 身体表現 ダンス サーキット運動 器械体操 鉄棒 跳び箱 マット	水泳 ボール運動 ゲーム 競技
3. 認知・学習	基本的な認知 形、大小、色 マーク 絵、写真	国語 言葉、文字、 文の理解 文字を書く 文を書く	算数・数学 数、量 金銭、時間 計算	準備・片づけ 係活動 製作 手順・工程の理解 道具の操作 作業
4. 情操・ コミュニケーション	受容・理解 身体接触 身振り・指さし 具体物、 カード 絵、マーク、写真 音声言語 文字・文	表出・表現 視線、動作、音声 身振り・サイン 具体物 カード 絵、マーク、写真 一語文 二語文以上 文字、文、AAC機器	予定の理解 具体物 カード 絵、マーク、写真 文字・文 音声言語	行動の調整 情緒の安定
5. 社会性	人との関係 集団での活動	移動 通学 交通機関の利用 自転車・車 電車・バス 交通ルール理解 信号 踏切	家庭での生活 手伝い・家事 趣味・遊び 買い物 留守番	地域での生活 公共機関の利用 放課後・余暇 趣味・遊び スポーツ イベント参加 進路・労働 福祉サービスの利用

1. 基本的生活習慣

項 目	指導内容(目標)の例
食事	口に入れてもらうと、噛む、飲み込むことができる 合図があるまで(いただきますまで)待つことができる スプーン、フォークで口に運んで食べることができる コップ等を持って飲むことができる 箸を使って食べることができる 準備(配る、とってくる)をすることができる 食器を持つ、手を添える等して食べることができる サイン、カード、言葉のどれかでおかわりを伝えることができる サイン、カード、言葉のどれかで食べたくないこと(物)を伝えることができる いろいろな食品、食材を好き嫌い無く食べることができる マナーや衛生に気を配って食べることができる 準備、片付け、掃除が一人でできる
排泄	定時にトイレに行き用を足せる 抵抗なく(少なく)トイレに入れる 促されて(サイン、カード、言葉)トイレに行ける サイン、カード、言葉のどれかでトイレに行きたいことを伝えることができる 一人でトイレに行き用を足すことができる ズボン、パンツを下げないで(尻を出さないで)排尿ができる(男子) 自分で判断してトイレに行ける 慣れないトイレでも用を足すことができる 洋式トイレ、和式トイレの使用ができる トイレトペーパーで拭くことができる 排便、排尿後の手洗いができる ノック、戸を閉める等のマナーを守って用を足せる
靴、衣服の着脱 身だしなみ	着替えの支援に応じる姿勢がとれる 靴を脱ぐ、履くことができる 服(下、上)を脱ぐことができる 服(下、上)を着ることができる 決まった着替えの場所に行くと着替えを始めることができる 靴を左右正しく履くことができる 固結びができる 蝶結びができる ボタン、チャックができる 前後、表裏を正しく着ることができる 予定表(絵、写真、文字)を見て必要なときに着替えを始めることができる 必要に応じて(汚れたときなど)着替えをすることができる 気候にあわせて自分で衣服の調節ができる 衣服の乱れを直すことができる 流行やTPOにあわせて服を選ぶことができる
整理整頓 物の管理 衛生 掃除・洗濯	カバンを所定の場所にしまえる 連絡帳、給食袋、タオルを所定の場所に出せる 連絡帳、給食袋、タオルをカバンにしまえる 服をハンガーにかけることができる 衣服をたたむ、しまうことができる 手順に沿って手を洗える 必要に応じて(汚れたとき)手を洗える 手順に沿って歯磨きをすることができる 机、椅子等を運んで片づけることができる 雑巾がけができる 決められた回数の雑巾がけができる 雑巾を洗う、絞ることができる ほうきで掃く、ゴミをとることができる 清掃が始めから終わりまでできる 洗濯機で洗濯ができる 靴が洗える 洗濯物を干す、取り込むことができる 風呂で体を洗う、髪を洗うことができる 爪を切ることができる

自閉症の特性と支援のポイント ―基本的生活習慣―

項 目	自閉症の特性と支援のポイント
食事	○偏食 味覚、嗅覚の過敏や、食材、調理法へのこだわり等により偏食のある場合がある。どうしても食べることの困難な物については、無理に食べるよう指導するのではなく、いらないことを伝えられるようにしていく。こだわりによる食べず嫌いや、少しずつなら食べられそうな場合、好きな物の前に一口食べる、量を少なくする、形状を変えるなどして、バランスよく食べられるようにしていく。どうしても食べられない物から少し抵抗がある物まで、程度を知った上で手だてを考える。一口あるいはスプーン半分でも食べられたら好きな物を食べる等、無理のない方法を考える。 ○おかわり等の意思表示 おかわりがほしい、もう食べたくない(残したい)、食べられない等の意思表示を教える。言葉で難しい場合は、指さし、サイン、カード等の方法で伝えられるようにする。楽しい食習慣の中で食べられる物を増やしていくことと、コミュニケーション(表出、表現)の力を育てていくことにつながる。 ○食動作(食器、道具の使用) スプーン、フォーク、箸等の使用については、自己流の持ち方が定着すると修正がききにくい。始めから正しい持ち方を教える。 ○準備、片付け 配膳には、一つずつとる、決まった数とってくる、一つずつ配る等の活動がある。視覚的にわかりやすい手だてを工夫するなどすれば、決まった役割を担えるようになる。
排泄	○トイレに対する抵抗 臭い、音、暗さ等が原因の場合や、慣れないトイレへの抵抗(こだわり)や、ここでと決めている場合もある。原因を理解した上で、それに応じた配慮や手だてを考える。 ○より自立した習慣へ 定時に大人と一緒に行ってする、促されて行く、行きたいことを伝える、行きたくなったら自分から行くというように、より自立した習慣を身につけていく。その際、言葉(音声)による働きかけだけでなく、子どもに応じてカード等の視覚的な手だてを使うと効果的である。カード等を使うことで行きたいことを伝える手段にもなっていく。うまく排泄できたことをほめる等して動機を高めることも大切。活動から逃れたいためにトイレをアピールする場合は、よく見極めた上で、逃れたいという場合は、活動の内容を見直す、活動が一区切りしたら行くというように手だてを考える。 ○排泄の手順 排泄の仕方、トイレの使用、手洗い等の手順について、一度身に付いたやり方を修正しにくいことも多い。はじめから正しい方法を教える。子どもに応じた視覚的にわかりやすい手だて(手順表、目印等)を用意する。
靴、衣服の着脱 身だしなみ	○触覚の過敏 過敏による衣服への抵抗や、苦手な素材があるということへの理解が必要。 ○とりかかり 着替えが習慣として定着していない、状況を判断して着替えに取りかかることが難しいという場合には、サイン、カード、言葉で示して促す、予定表を見てとりかかる等の手だてを考える。他の活動の場所と別に着替えの場所を固定する(構造化することによって、何をすればいいのかを分かるようにすることも効果的。 ○着替えの手順 脱ぐ順番、脱ぎ方(裏返しにならないやり方等)、しまい方について、その都度やり方や順番が変わらないように固定して教える。絵、写真、文字による手順表や、衣服に決まった目印を付けることも効果的。始めから終わりまでの見通しをもてる手だてをし、短時間(見通しのもてる時間)で終われるようにする。着替えに対する動機が薄いことが多いので、終わったら～ができる、というようにすることも効果がある。
整理整頓 物の管理 衛生 掃除・洗濯	○環境の整理 教室の環境を整え、自分の物をしまう場所、友達のをしまう場所、所定の物を出す場所を固定してわかりやすくする。絵や写真、文字による目印をつける。わかりやすく整頓された環境により、子どもが自ら見て判断することがしやすくなる。また、自閉症児の特性として細部の視覚刺激に敏感に反応してしまう場合もおおい。必要に応じて余分な刺激をなくす(カーテンで隠すなど)配慮も必要である。 ○手洗い、歯磨き 手洗い、歯磨きは手順、やり方が意外と難しい。一見やっているように見えてもできていない場合がある。手順と回数を分かるように示し(手順書)、はじめは手を添えて支援する。支援は後ろから行う方が自分でやることに発展しやすい(歯磨きの仕上げは前からでもよい)。回数は、数唱か可能ならカウントダウンにするとわかりやすい。 ○清掃 手順、方法、道具、回数がわかりやすいように視覚的に提示する。例えば、雑巾がけの拭く場所の目印、回数の分かる手だて、ほうきでゴミを集める場所の印、机を置く場所の印、清掃の手順表等。

2. 健康・運動

項目	指導内容(目標)の例
睡眠 生活のリズム 服薬 発作 健康の維持	規則正しく睡眠をとることができる 規則正しく食事、水分を摂ることができる 自分で薬を飲むことができる サイン、カード、言葉のどれかで体調の変化や痛みを伝えることができる 事前に練習をすれば診察を受けることができる いつでも診察を受けることができる 自分で体温を測ることができる 健康に注意して生活することができる 一人で診察を受けに病院に行くことができる
手、指の動き 全身の動き 歩く 走る 跳ぶ	姿勢を保持することができる(座位、立位) 歩行ができる 走ることができる 四つ這い、高這いができる 目と手を協応させて握る、つまむ、持つことができる 投げることができる 目標をねらって投げるができる しゃがむ、立つ、かがむ動作ができる コースに沿って走ることができる 決まった距離を走ることができる 決まった時間いっぱい走ることができる 両足で跳ぶことができる 飛び降りることができる
体操 身体表現 ダンス サーキット運動 器械体操 跳び箱 マット 鉄棒	かけ声、手本、音楽にあわせて手、腕を動かすことができる かけ声、手本、音楽にあわせて足を動かすことができる 道具(棒、フープ等)を使った体操の動きができる。 手本を見て模倣した動きができる 伸脚、脚の屈伸ができる 前後屈ができる 手本を見ながらラジオ体操の動きができる コースを守って一人でサーキット運動ができる 跳び箱にあがる、飛び降りることができる 平均台の上を歩くことができる マットで前転ができる 鉄棒にぶら下がるができる 鉄棒で前回りができる
水泳 ボール運動 ゲーム 競技	プールに入ること、楽しむことができる 水の中を歩くことができる 顔を水中につけることができる 水中で開眼することができる 浮き身、蹴伸びができる 一定の距離を泳ぐことができる ボールを投げる、受ける、蹴ることができる グローブでボールを捕ることができる バットでボールを打つことができる キックベース、サッカー等でボールを追うことができる ドリブル、パスができる シュートをすることができる 簡単なルール(アウト、セーフ)がわかって参加できる 勝敗を意識して全力で参加することができる ゲームのルールを理解して試合に参加できる

自閉症の特性と支援のポイント ―健康・運動―

項目	自閉症の特性と支援のポイント
睡眠 生活のリズム 服薬 発作 健康の維持	○生活のリズム 季節や気候の影響、家庭環境等によって生活リズム特に睡眠のリズムが乱れていることがある。適度な運動量の確保や、家庭と連携して生活リズムを乱している要因を知り、手だてを考える。ひどい場合には、医療機関との連携により服薬等についても検討する。 ○気候への過敏 高温や多湿、気圧の変化による不快感に過敏に反応することがある。単なるわがままと考えず、弱いということを理解した上での手だてを考える。 ○不快、体調を伝える 不快であること、痛み、体調を伝える手だて(サイン、カード、言葉等)をもつことで、気持ちを静めたり痛み等の原因の治療をしたりすることにつなげる。ひどいパニックを避けることも可能になる。必要なら、不調の場合に一人になれる場所(カームダウンエリア)を用意する。 ○検診、診察 検診の際に、事前によく練習をする、何をどのようにするのか、いつ終わるのかを視覚的手だてで知らせる等により、スムーズに受けられるようになることもある。 ○チック、トゥレット症候群 自閉症とチック(運動、音声の不随意運動)が合併することがある。この場合は、生活全体でのストレスの見直しや医療との連携が必要となる。
手、指の動き 全身の動き 歩く 走る 跳ぶ	○動きのぎこちなさ 自閉症は運動機能に障害を受けているのではないが、身体動作の協応が困難であったり、不適切な動きやぎこちなさがあったりする場合も多い。身体の硬直化、弛緩、つま先歩き、独特な走り方、特異な指の形や全身の姿勢、指をくねらせる、身体を揺する、回る等の常同行動のある場合も多い。興味や活動の偏りにより体を動かす経験も偏っていることが多いので、学習の中でバランスよく身体を動かす機会を作れるように配慮する。 ○バランス、協調(協応)運動 特に小学部段階では、身体をバランスよく動かすことに視点をあてた活動を考える。四つ這い、前向き歩行、後ろ歩き、両足跳び、ケンケンなどの基礎的運動技能やボディイメージの確立につながる指導を行う。そして、跳び箱、マット、鉄棒を使った運動や、手、体幹、脚の協調や、音楽等の外界刺激に対する協調を必要とするリズム運動、体操、ダンス、身体表現や、サーキット運動へと進める。運動の模倣が難しい時には身体に触れながら具体的な動作を教える。高次の課題としては、～しながら～できるといった、複合的な運動ができることも指導内容となる。
体操 身体表現 ダンス サーキット運動 器械体操 跳び箱 マット 鉄棒	○準備運動 集団が大きい、場所のこだわり、音への抵抗等で準備体操に参加できない場合は、個別又は小さい集団での準備運動を工夫する。模倣が苦手な体操に参加しにくい場合は、道具を利用した体操など身体をどう動かせばいいのかが具体的にわかる手だてを考える。 ○姿勢の緩和 運動量の不足や感覚的な問題から、膝や足首、上体が屈曲優位になってしまうこと、拘縮や関節の可動域に問題がでることもある。全身の柔軟運動やストレッチ、弛緩といった、身体を十分に伸ばす指導が必要となることもある。 ○走る距離、周回数 周回走やサーキット運動ではコースをわかりやすくする手だてと、周回数をわかりやすくする手だてが必要。どこを走る(歩く)のか、いつまで続けるのかが分かる手だてを考える。 ○走ることへの支援 一人で走り続けることの難しい場合は、手を軽く握って一緒に歩く(小走りで走る)、横を一緒に走る、後ろを一緒に走る、という順で支援する。一人で走れる場合でもペースを守ることが難しいことが多い。速く走ってすぐに歩いてしまったり、無理なペースで走り続けてしまったりすることを避けるため、一緒に走って適切なペースを教える。
水泳 ボール運動 ゲーム 競技	○水泳 自閉症の子どもには水遊びの好きな子が多いが、何らかの理由で水泳指導をされることへの抵抗のある子どももいる。抵抗がある場合は少しずつ慣らししていくようにする。無理にでも水に入れば楽しさが感じられるだろうという指導はいけない。水中に顔をつけられない場合、ゴーグルをつけて練習することでもできるようになることもある。 ○ゲーム ルールを始めに視覚的にわかりやすく示し、手順や終わりを明確にすることが大切。集団でのゲームや競技、レクリエーションを通して、ルールや人と協力すること、役割分担を学ぶ機会とする、また、余暇の楽しいな活動をもつことへの発展が期待できる。

3. 認知・学習

項 目	指導内容(目標)の例
基本的な認知 形、大小、色 マーク 絵、写真	物を注視することができる 指さすことができる 絵、写真、マーク同士で同じものを対応させることができる 同じ形を合わせることができる 同じ色を合わせることができる 絵、写真、マークと具体物、人を対応させることができる 絵、写真、マークと場所が対応できる 直線、曲線、ひらがなのなぞり書きができる 見本と同じ形を描くことができる 具体物の形を真似て描くことができる 物の属性、用途、種類による分類ができる 物の属性、用途、種類による組み合わせができる
国語 言葉、文字、文の理解 文字を書く 文を書く	身近な物、色、形などの単語がわかる、言える 身体の部分の名前がわかる、言える 身近な人の名前がわかる、言える 二語文以上の話がわかる、言える ひらがな、カタカナ、簡単な漢字を読むことができる 単語(ひらがな、カタカナ、漢字)の意味がわかる 簡単な文を読んで意味がわかる ひらがな、カタカナ、簡単な漢字を書くことができる 簡単な文を書くことができる 濁音、促音、拗音等を正しく使って文が書ける 助詞や接続詞を正しく使って文が書ける 敬語、言葉遣いに気をつけて話せる 本、雑誌、新聞等を読むことができる キーボードや携帯電話で文が打てる アルファベット、簡単な英単語がわかる
算数・数学 数、量 金銭、時間 計算	見本と同じ数の具体物(5まで)の対応ができる 数字を読む、数唱をすることができる 数字(10まで)と具体物を対応させることができる 100まで数えることができる お金の種類がわかる お金を数えることができる 月日が言える アナログ時計で時間がわかる あと何分、あと何時間がわかる 電卓を使って計算ができる 具体物で10までの加法、減法ができる くり上がり、くり下がりのある加法、減法ができる 生活の中でお金を使うことができる 生活の中で電卓を活用することができる
準備・片づけ 係活動 製作 手順・工程の理解 道具の操作 作業	示された物(サイン、カード、言葉)をとってくることができる 物を所定の場所にしまうことができる 決まった手順で準備ができる 決まっている係活動、作業に自分からとりかかれる 身近な道具を使うことができる 具体物に沿って作業を続けてをすることができる 手順に沿っていくつかの道具を使うことができる 状況を考えて必要な物の準備ができる できばえを考えて丁寧に作ることができる 目標数を考えて作ることができる 時計を見ながら所定の時間内続けて活動できる 状況に応じて何をすべきか考えて活動できる 困ったときに質問、相談をして解決できる 集団での分業、分担に沿った判断、工夫ができる 頒布に向けての必要な工夫、活動ができる

自閉症の特性と支援のポイント ―認知・学習―

項 目	自閉症の特性と支援のポイント
基本的な認知 形、大小、色 マーク 絵、写真	○弁別学習から教科学習へ 形、大小、色、物等のマッチングや分類の学習から、子どもに応じて絵カードや文字カードの理解、文字や数字のマッチング、分類、読み、書き、計算等の学習に発展させていく。コミュニケーションの力につながる内容も含まれる。 ○個別の課題 自閉症児であっても認知面での実態、発達段階については個々に全く異なっている。自閉症の特性と子どもの認知面の実態とを考慮して、個々にあった課題を学習する。子どもに応じて個別の課題を用意すること、自分で進められるように教材の工夫をすること(自立課題)を検討する。 ○ねらいの明確さ 型はめ、パズル、マッチング等の活動を得意とすることが多い。認知を育てる学習で注意することは、何をねらった活動、教材なのかを明確にすることと、指導者のねらいにあった学習を子どもがしているかどうかを常に確認することである。一見取り組んでいるように見えても、子どもが指導者の意図にあった学習をしていない場合もあるので、常に確かめている必要がある。 ○学習環境の調節 自分に何を期待されているのか、何をすればいいのか分からずに混乱してしまうことも多い。今何をするのか、何を求められているのかを明確にするための環境調整(構造化)をすると学習に取り組みやすくなる。予定を視覚的に示すなどわかりやすくする、活動と場所を1対1で対応させる、課題の順番をわかりやすく提示して最後(終わり)が分かるようにする等が効果的である。あわせて、周囲の刺激に反応しやすい場合には、机を壁に向ける、ついたてで仕切る、刺激となるものを隠す等の配慮をする。
国語 言葉、文字、文の理解 文字を書く 文を書く	○課題の配列、提示 短い時間でできる課題をいくつか組み合わせて、順番に提示すると自立的に取り組みやすい。課題は、例えば、最初に簡単にできる課題、次に教員と一緒に取り組む新しい課題、一人でできる課題、大好きな課題というように、目的を明確にして配列する。 提示の仕方は、行う課題の量や、どこで終わるのか、終わった後どうするのか分かるように提示する。視覚的に優位な子どもが多いので、1対1の対応、上から下へ、左から右へ、はじめと終わりが見通せるように課題の提示をする(ワークシステム)。終わった後好きな活動や物が用意してあると動機、意欲が高まる。
算数・数学 数、量 金銭、時間 計算	○般化 自閉症児は一般に般化が苦手な傾向がある。教室で学習したことが実際の生活の場面とつながりにくい。なるべく実際の物や場面に即して進めていくと効果的である。例えば金銭の学習であれば、数の学習や計算の学習、お札や硬貨を使ったやりとりの学習、実際の買い物の学習というように発展させる。子どもの発達段階にあわせてできることを積み上げていくこと(ボトムアップ)と、日常生活に必要な内容を身につけていくこと(トップダウン)の両面から、学習したことが生活の中で生きていくことを目指して学習を組んでいく。
準備・片づけ 係活動 製作 手順・工程の理解 道具の操作 作業	○準備、片付け、係活動 将来の働く生活につながる活動として、授業の準備、片付けの活動や係活動を大切にする。準備、片付けの活動を行う上では、教室の物の整理をし、教材、道具の収納場所をわかりやすくする。係活動は毎日の学校、学級の生活の中から子どもにあった活動を見つけて役割を持たせるようにする。自閉症児の多くは、みんなのために活動するという意識を持ちにくいいため、やられている、パターンとしてやっていることになりがちで仕事の意識につながりにくい。まず、先生が喜んでくれる、次にみんなのために喜んでくれる、というようにしていく。 ○手順、工程の整理 作る活動や作業を進めるにあたっては、自分の活動を一人で手順に沿って進められることをまず目指す。手順や道具をわかりやすく示す。始めと終わり、数をわかりやすく設定し、道具や材料を整理する。トレーや箱を活用すると手順や数、量が整理しやすい。必要であれば工程表、手順書を用意する。道具の正しい使い方をはじめから教えることも大切。 ○作業 作業室全体として、物の流れや、道具の配置、収納を整理する。棚、箱等を使うと整理しやすい。自分の場所での活動から、準備する、材料をとってくる、出来上がった物をしまう、次の工程に渡す、片付けるといった全体と関連した動きへと発展していく。さらには、教員や友達との協力、意思交換をしながらの作業、役割の意識、責任感といった、将来の仕事や生活につながる社会性への発展も考えていく。

4 情操・コミュニケーション

項 目	指導内容(目標)の例
受容・理解 身体接触 身振り・指さし 具体物、 カード 絵、マーク 写真 音声言語 文字・文	身体接触の働きかけに反応できる 身振り、指さしによる簡単な働きかけに応じることができる 具体物による働きかけに応じることができる カード(絵、マーク、写真)の働きかけに応じることができる 音声言語の簡単な働きかけに応じることができる 三語文程度の話がわかって応じることができる 単語(ひらがな、カタカナ、漢字)の意味がわかる 簡単な文を読んで意味がわかる 本、雑誌、新聞等を読むことができる 携帯メール、eメールを読むことができる アルファベット、簡単な英単語がわかる
表出・表現 視線、動作 音声 身振り・サイン 具体物 カード 絵、マーク 写真 一語文 二語文以上 文字、文 AAC機器	視線、表情、動きで人に伝えようとする 音声で人に伝えようとする 身振り、サイン、手を取る等して伝えようとする 具体物で伝えることができる カード(絵、マーク、写真)で伝えることができる 決まったあいさつ(おはよう、さようなら)が言える 単語、一語文で伝えることができる 二語文以上の話で伝えることができる 会の司会をすることができる 状況に応じたいくつかのあいさつが言える サイン、カード、言葉のどれかで終わったことが伝えられる サイン、カード、言葉のどれかで拒否、同意の表現ができる サイン、カード、言葉のどれかで援助を求めることができる。 自分の名前が言える、書ける。 敬語、言葉遣いに気をつけて話せる 自分の感想が言える 文字、単語を書いて伝えることができる 簡単な文を書いて伝えることができる 携帯メール、eメールで伝えることができる
予定の理解 具体物 カード 絵、マーク 写真 文字・文 音声言語	具体物で次の活動、場所がわかる カード(絵、マーク、写真)で次の活動、場所がわかる カード(絵、マーク、写真)で一日の活動がわかる 単語、文で次の活動、場所がわかる 単語、文、日課表で一日の活動がわかる カード(絵、マーク、写真)で週の活動がわかる 単語、文、日課表で週の活動がわかる 予定表(絵、写真)で単元の予定がわかる 予定表(文字、文)で単元の予定がわかる 音声言語の説明で一日の活動がわかる 音声言語の説明で週の活動がわかる
行動の調整 情緒の安定	決まったパターンなら落ち着いて行動できる 周りの人にあわせて落ち着いて行動できる 決まった場所で気持ちを落ち着けることができる 決まった活動で気持ちを落ち着けることができる 予定に沿って落ち着いて行動できる 周りの働きかけで、待つこと、我慢することができる 予定が変わっても予定表、カード等を見て納得できる 予定が変わっても言葉の説明で納得できる 予定が変わっても状況を判断して納得する、我慢することができる 自分の意見を伝え、話し合うことで納得する、我慢することができる

自閉症の特性と支援のポイント ―情操・コミュニケーション―

項 目	自閉症の特性と支援のポイント
受容・理解 身体接触 指さし 身振り、サイン 具体物、 カード 絵、マーク 写真 音声言語 文字・文	○偏ったコミュニケーション コミュニケーションの偏りは、自閉症の三つ組み症状(ウィング)の中でも主要なものと言える。主に音声言語によるコミュニケーションが成立しないことによる問題行動(ストレス、注目を得たい、嫌なことからの逃避、物やしたいことを得たい等)が出る場合もある。その問題行動が何のためにされているのかを見極め、同じ機能を持つコミュニケーションを身につけることが大切である。コミュニケーションは、受容と表出、非言語性のもと言語に分けられる。このことを考慮して指導を考える。 ○受容、理解 子どもの実態に応じた適切なレベルのコミュニケーションを指導していく。注視、注意を向けること、指差しの理解(注意の共有)、物に名前のあること、理解、身振り・サインの理解、簡単な言葉の理解というように、受容・理解に関する子どもの実態を把握して指導する。音声言語だけでなく、指さし、身振り、サイン、具体物、カード(絵、マーク、写真)、文字・文を子どもに応じて使う。 ○意図・心情の理解(心の理解)の困難さ 自閉症児は他者の意図や気持ちを察してコミュニケーションすることが難しいと言われている。伝えられたことを言葉どおりそのまま理解する傾向があることを分かって伝えることが必要である。
表出・表現 視線、動作 音声 身振り・サイン 具体物 カード 絵、マーク 写真 一語文 二語文以上 文字、文 AAC機器	○コミュニケーション意欲 話し言葉を獲得していなかったり、話し言葉があってもコミュニケーション手段として機能していないこともある。エコリア、人称の逆転、疑問文による要求等の特異性があることも多い。このようなことから、表出をしていても伝わらない(受け入れてもらえない)ことが多くなり、人に伝えようという気持ちを持ちにくい状況になっていることもある。伝えようという気持ちを持ちやすい環境、伝えることの便利さ、うれしさを感じられる環境が必要である。得意な表現や、言葉でない何らかの方法での意思表示に丁寧に応じるようにする。コミュニケーションをしようという気持ちを盛り上げながら、子どもに応じて正しい表現を教えていく。 ○表出、表現の方法 生活の中で子どもが持っている表出、表現の方法を把握し、問題点についても知っておく。どのような場面で自発的に表出ができていないか、また、どのような内容の表現ができていないのか(要求、援助を求める、排泄の予告、体調、拒否、質問、情報の伝達等)についても知っておく。「コミュニケーション(表現)のためのチェックリスト」を活用すると具体的に把握しやすい。これらを知った上で、子どもにあった表出、表現を引き出す手だてを考える。不適切な表現については、適切な表現に変えていくようにする。 ○表出を引き出す場面設定 自閉症児の場合、日常の自然な場面、偶発的な場面で適切な表現を身につけていくことが難しいことも多い。必要であれば意図的に必要な場面を設定して教えていく。日常よく使う物や、よくある場面がよく使う表現を引き出すように意図的に設定して学習する。身に付いた表現については、日常生活で自然に使えるように(般化していくように)指導していく。絵、写真、文字のカードを使えると誰にでも伝えやすくなる。
予定の理解 具体物 カード 絵、マーク 写真 文字・文 音声言語	○予定の提示 言葉による説明や、一般的な予定表、日課表、カレンダー等では予定を理解できない場合が多い。予定がはっきりしないと、自分のパターンの活動に固執し、活動の変更に応じられないということも多くなる。子どもの理解レベルにあわせた予定表を用意する。学級全体へのものか、個別の提示が必要かは子どもに応じて行う。予定表により、混乱なく予定された活動に取りかかれること、自立的に活動に取りかかれること、予定の変更に対応できるようにする。また、予定の中に好きな活動を入れる、選択する場面を取り入れるなどしていくと効果的である。 ○個別の予定表 子どもが理解できる情報の種類(具体物、絵、マーク、写真、文字)や、理解できる時間の長さや量、どのような提示がいいのかについて検討する。「スケジュールを作成するためのチェックリスト」を活用すると具体的に把握しやすい。
行動の調整 情緒の安定	○感覚の過敏 感覚の過敏により情緒が不安定になっていないかを見極めをする。特に聴覚、視覚の過敏により、耐えられない音声刺激や視覚刺激があり不安定になっている場合は、原因に対する手だてをする必要がある。 ○不安への対応 情緒が不安定になる根底には何らかの恐怖や不安があることが多い。感覚的な過敏による恐怖、次の予定への見通しがもてない不安、不快な経験のフラッシュバック等の原因の理解と対応をする。あわせて、興奮した時に気持ちを静める場所を用意し、自分を落ち着ける方法を指導していく。 ○行動の調整 場の状況に応じて、あるいは人の思いを察して行動を変えることが難しい。予定を子どもに分かる方法で伝えることとあわせて、いつもと予定が変わることが理解でき、そのことにあわせることができるようにしていくことが指導内容として大切になる。

5. 社会性

項目	指導内容(目標)の例
人との関係 集団での活動	身近な人と落ち着いて過ごすことができる 身近な人の働きかけを受け入れられる 身近な人に伝えようとすることができる 慣れない人とでも落ち着いて過ごすことができる 慣れない人とでもコミュニケーションがとれる 集団の中にいることができる 集団の中で他の友達の活動を見ることができる 集団の中で一緒に活動できる 順番を守る、待つことができる 順番を譲ることができる 集団の中で自分の役割を果たそうとできる 集団の中でリーダーシップをとって活動できる 集団の活動で、人に対するマナーや社会的なマナーを守ることができる。
移動 通学 交通機関の利用 自転車・車 電車・バス 交通ルール理解 信号 踏切	身近な人と一緒に校内を移動できる 校内のよく行く場所に一人で行くことができる 具体物、マーク、絵、写真を見てその場所に行くことができる 文字(単語、文)を見てその場所に行くことができる 状況、予定を判断してその場所に行くことができる 家からスクールバス停まで行くこと、帰ることができる 家、学校の近くの慣れた場所に行くこと、帰ることができる 信号を守る、車をよけることができる 交通ルールを守って徒歩で行くことができる 交通ルールを守って自転車で行くことができる 交通機関を使って登下校ができる 切符を買う、乗車賃を払って交通機関が利用できる 慣れた場所に電車、バス等を使って行ける 地図を使う、説明を聞く等して初めての場所に行ける 自分で計画して旅行に行ける
家庭での生活 手伝い・家事 趣味・遊び 買い物 留守番	規則的に食事、睡眠をとって生活できる 決まった手伝い・家事ができる 趣味・遊びを楽しむことができる 趣味・遊びを決まった時間内で楽しむことができる 身近な人と一緒に買い物に行くことができる 買い物に行って決まった物を買ってくることができる 決められた予算で買いたい物を買うことができる 一人で遊びに行き、時間になったら帰ってくるができる 一人で留守番ができる 来客、電話の応対ができる
地域での生活 公共機関の利用 放課後・余暇 趣味・遊び スポーツ イベント参加 進路・労働 福祉サービス の利用	放課後、休日に家庭以外で過ごすことができる 身近な人と一緒にイベントに参加できる 身近な人と一緒に外出して公共機関が利用できる 慣れない人一緒にと外出、イベントの参加、公共機関の利用ができる 一人で(友人と)公共機関、娯楽等が利用できる 外出先で、サイン、カード、言葉のどれかで援助を求めることができる 一定期間、泊まって施設の利用ができる 電話、携帯、メール等で人と連絡をとることができる 困ったときに人に伝える、相談することができる 人に自分の希望を伝えることができる 実習先で人と一緒に仕事をするができる 仕事と報酬の関係がわかり、報酬を期待して仕事をするができる 卒業後の生活、進路、職業について自分の思いや希望を伝えることができる 福祉・労働関係の機関で必要なことを伝えることができる 自分で福祉・労働関係機関への相談等ができる

自閉症の特性と支援のポイント ―社会性―

項目	自閉症の特性と支援のポイント
人との関係 集団での活動	○社会性の障害 自閉症児の社会性の発達を妨げている原因として、他者の心の理解の難しさがあると考えられる。また、2つ以上のことを同時処理することの難しさ(シングルフォーカス)により、相手の発信することの一部に反応して不適切な行動が生じてしまうということもある。このような特性への理解がまず必要である。 ○人との関係、集団への参加 人との関係が難しい場合、まず身近な人と安心・信頼できる関係を作ることから始め、次に小さな集団での活動、子ども同士の関わりへ、そして、慣れない人との関係、大きな集団へというように考えていく。大きな集団への参加を無理に進めず、子どもの不安にあわせて参加の形を発展させていくようにする。 ○ルールや役割へ 人といろいろな経験を共有し楽しいと感じたり、コミュニケーションをとったりすることを通して、人にはそれぞれ自分とは違う意図や欲求があること、集団での活動にはルールがあることを知るようにしていく。その際、ルールを子どもに分かる方法で明確にし、ルールを守ること、適切な行動をとることを具体的に指導する。例えば皆と一緒に行動すること、順番を守ること、自分の役割を果たす、人に譲る、手助けをするといったことを教えていく。 ○ソーシャルスキル、コミュニケーションスキル 人との関係のとり方、集団の中での適切な行動や場に応じた会話については、自然に身に付くことが難しい。日常の活動を通して教える、偶発的な機会に教えるだけでは不十分なことも多い。意図的な学習場面を設定して、社会生活をする上での行動様式や会話の様式をスキルとして教えることも必要である。人と接するときの距離やマナー、質問、選択、謝罪、拒否、主張の実際の言葉ややり方等について具体的に教え、レパートリーを増やしていく。
移動 通学 交通機関の利用 自転車・車 電車・バス 交通ルール理解 信号 踏切	○移動 大人と一緒に移動から一人での移動へ、視覚的な手がかりにした移動から自主的な判断での移動へと、子どもの実態にあった形でより自立的、自発的な移動を育てていく。校内での移動の経験から、慣れた経路での通学(スクールバス停まで、学校まで)へ、さらには家の周辺の移動へというように、子どもの実態と年齢に応じて社会生活に必要な移動の力を育てていく。 ○般化の困難さ 自閉症児の場合、学習したことを実際の生活場面に般化することが困難なことが多い。学校で行った学習を生活に生かすには、子どもの生活の実際の場面の様子をよく知って個別の手だてを考える。また、実際のその場面、場所で教えることが効果的である。買い物学習や校外学習、その事前学習等の機会に、実際に交通機関やお店、公共機関を利用する経験を積み重ねていく。また、家庭と連携して日常の生活の中でもそのような経験が積み重ねられるようにしていく。 ○家庭生活のリズム ビデオやゲーム、オーディオ等については内容が予測でき、繰り返し視聴できる等の理由から好きな子どもが多く、家庭での楽しみになっていることが多い。時間を区切った楽しみであれば、余暇の楽しみとして意味ある活動となるが、長時間であると生活に影響が出てくる。規則正しい睡眠や食事とあわせて、生活のリズムを整えるように家庭と連携していく。 ○余暇 家庭での生活や職業生活において余暇をどう過ごすかの意味は大きい。注意を集中できる時間が短いことも多いので、日頃から学習と休憩(好きなことのできるオフタイム)とを子どもにあわせた長さで組み合わせ設定し、活動と休憩を適切に行えるよう指導していく。さらに発展させて、家で静かに過ごす時間、家で自分の好きなことをして過ごす時間、公共機関等を使って好きなことに取り組む時間など、自分の楽しみをもつことを家庭と連携しながら育てていくようにする。
地域での生活 公共機関の利用 放課後・余暇 趣味・遊び スポーツ イベント参加 進路・労働 福祉サービスの利用	楽しみが社会通念上問題となるような行動である場合は、ルールを明確に決めて問題のない(少ない)行動にしていく、あるいは代替の行動に替えていくことが必要である。 ○手伝い、家事 年齢の小さいうちから家庭や学校で習慣として役割を持っていることが大切である。学校での係活動等と家庭での役割について連携をはかりながら、好きなことを仕事にすることから始めるなどして、手伝いや家事への参加ができるようにしていく。 ○労働と報酬 労働と報酬の関係について理解することは、社会生活につなげていく上で大切である。自閉症児の場合、手伝いや作業の成果が人に喜んでもらえるというような、共感や感情を共有する動機が持ちにくい。具体的な成果、報酬、例えばシールを集めて望むことができる手に入るというような、具体物あるいは代わりの機能を持ったもの(トークン)のやりとりを通して動機を高めると同時に、社会における労働と報酬(貨幣)の関係の理解につながる指導を行う。 ○支援の卒業後への移行 自閉症児の行動は、一般的には理解が困難で、このことが社会参加、就労の困難につながっている。学校で行っていた支援を卒業後につなげていくために、障害や行動への理解とあわせて、具体的な支援方法、例えば視覚的な支援の道具等を引き継いでいくことも必要である。

指導内容表の活用の仕方

この指導内容表は、一人ひとりの児童生徒の実態把握をし、具体的な目標を設定するためと、その目標達成のために必要な指導内容を明らかにするために作成されました。

また、自閉症の児童生徒の支援にあたって、どのような指導内容、支援方法が有効かを明らかにすることがこの表のもうひとつのねらいです。

本校の個別の指導計画では、児童生徒の様子を5つの項目にそって整理して実態把握をし、これをもとに長期目標を設定しています。

指導内容表は、個別の指導計画の5つの項目ごとに、4つの内容に分けて指導内容の代表例をあげてあります。指導内容は、児童生徒の具体的な目標が設定しやすいように、目標の形で記述してあります。さらに、それぞれの項目ごとに「自閉症の特性と支援のポイント」についてまとめてあります。

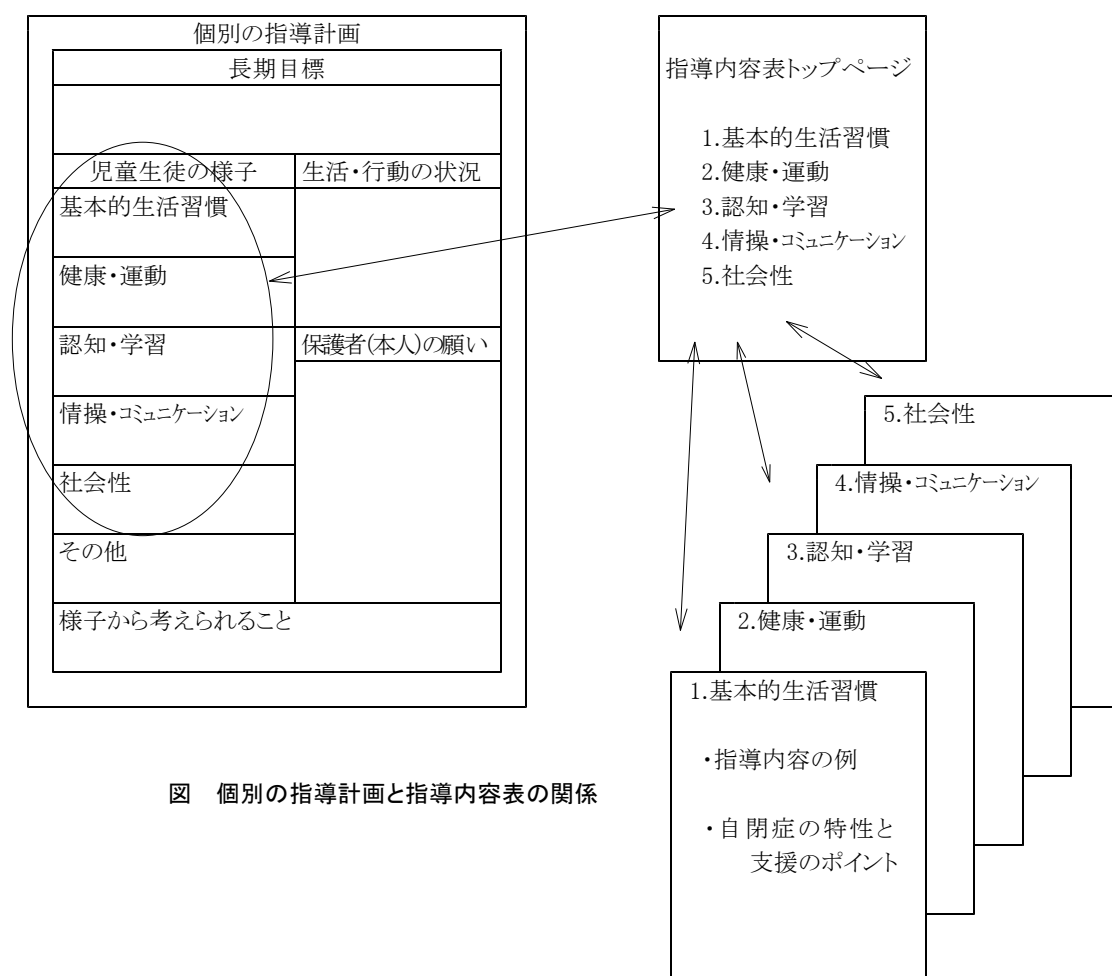


図 個別の指導計画と指導内容表の関係

この表を次のようなときに活用してください。

- ・個別の指導計画の「児童生徒の様子」を記入するときに。
- ・長期目標や領域・教科ごとの目標を設定をするときに。
- ・目標に対応する指導内容を考えるときに。
 - －すでに取り組んでいる指導内容を見直す
 - －新しく必要な指導内容は何かを考える
- ・認知面、社会性等の発達の様子から見て、いま必要な支援は何かを考えるために。
 - －発達支援、ボトムアップの視点
- ・社会参加をしていくのために、年齢に応じた支援の内容を考えるために。
 - －社会生活力、トップダウン、ライフステージの視点

あとがき

今年度は「児童生徒の特性とニーズに応じた教育」を全校研究テーマとし学部ごとに研究を推進してきた取り組みが5年目となりました。そしてここに、研究係を中心に、実践を通し課題を追究してきたものを平成27年度実践報告集「時計台」としてまとめることができました。

小学部は、今年度から基礎的な動きを育てる「朝の運動」を目指した研究を進めることになりました。研究の1年目として、澤江幸則先生を講師に招き研修を行い、授業の中でいろいろな動きに視点をおくことで、児童の意欲を高めることができました。取り組みたい運動一覧やチェックリストを作成することで、一人一人の発達段階に応じた指導支援にあたれるようになってきています。今後、実践を通し研究を深める中で、さらなる改善を図っていきます。

中学部は、作業学習のねらいを明確にしていく中で、多様化する生徒の課題に応えることができるよう研究を深めてきました。昨年度に引き続き荻野政仁先生に御指導いただきました。生徒の見通しのもとせ方や一人一人に適した目標の設定の仕方等の助言をいただき、授業実践に生かすことができました。今後も、作業学習を通して生徒一人一人が力を発揮できるような場面を増やしていきたいと考えています。

高等部は、昨年度に引き続き、作業学習を通して研究に取り組んできました。研究テーマについては「生徒が主体的に取り組むことのできる作業学習を目指した授業を考える」としての1年目でした。牧野英司先生には、今までの本校の研究の実践を踏まえた上での御指導をいただきました。生徒が主体的に取り組むことができるよう、5つの観点を明確にしながら授業実践に取り組んでいます。

重複・訪問学級では、今年度もコミュニケーション能力を生かすための授業実践に取り組んできました。さらに、3つの柱は、昨年度よりも手立てや人と関わる場の工夫等、より具現化したものにしました。保科靖宏先生には表出を引き出すための工夫などを指導していただき、実践に生かすことができました。一人一人の表情を豊かにし、コミュニケーション能力を引き出せるよう日々の授業を通し努めていきたいと考えています。

後多忙の中、本校の研究のために御指導・ご助言をいただきました各学部講師の先生方には心より感謝申し上げます。

平成28年3月

教頭 吉田 英男

研究同人

校 長 佐々木亮夫 教 頭 吉田 英男 高尾 早苗 事務長 三浦 京子
主幹教諭（教務主任） 佐久間裕之 副教務 田中 美貴

（小学部）

山村 志穂	熊谷 純子	谷口 有加	小濱 理	戸井めぐみ	佐々木希美
船越 由佳	小坂 真理	福島 克行	松本 岳史	宇井 恵美	中澤久美子
平井 潤	柿崎 貴子	佐々木曜子	松本 茂	根本 瑞穂	山崎 聖一
関根 史也	松山 未来	善塔 佑	武内麻希子	永山 美穂	平井 綾子
程塚 勇一	秋葉 伸行				

（中学部）

高際 宏	岩本 敬子	鈴木 良文	関根阿佑美	小林 弥佐	関口 恵
瀧川恵里子	伊藤 雄太	渡邊 博	阿部 光枝	山口 文治	齊藤 千晴
佐藤 一利	綿引あゆみ	田中 克己	古沢佐知子	越川 洋介	渥美 志帆
新城菜穂子	中塚 由章				

（高等部）

金子真由美	神田 聡	三谷 拓郎	斎藤 礼佳	真船 正敏	川畑 博嗣
小玉 香音	菊池 聡	大関 里英	加藤 薫	大宅 美希	三谷 俊彰
川崎日奈子	齊藤 達成	田村真倫子	望月ひろみ	小泉 信之	大竹 美穂
小出 清光	吉田かなえ	桑原 康男	山本 朱実	高尾 昇	松本奈津実
島岡奈緒美	小野 裕昭	小高 亮太	北原 晶子	青澤 仁美	牛島慎之亮
北見 健	笹倉 睦穂	段木 正規	佐藤 彩乃	岡本 秀明	篠原 智美
脇迫 翔平	伊藤 美咲	鈴木 彰典			

（重複・訪問学級）

坂 正明	齊木 彩香	鈴木百合子	加賀 奈苗	金澤 美桜	稲村 裕子
土屋 貴弘	飯田 浩子	城之下友香	高宮 好美	檜村 裕之	颯佐 裕太
伊藤 皇成	平塚 浩史	勝浦 章子	谷口 貴啓		

（養護教諭）

濱村 純子 前田 純子

（太字 研究係）

平成27年度 実践報告集 時計台
発行日 平成28年3月31日
編集・発行 千葉県立富里特別支援学校
〒286-0221 千葉県富里市七栄483番地2
TEL 0476（92）2100
FAX 0476（92）1984